

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三二一回)

平成二十五年十二月二十三日(月)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

5点 買ひしこと告げず年末宝くじ 弘子

4点①開け放ち小春日和を使ひけり 弘子

4点 メンチカツ揚げゐる音や雪催 明美

切抜きのみな捨て去らる十二月 秀一

3点②おろおろと存へて来し葱きざむ 弘子

①狐火やフェイスブツクの暗き闇 明美

縄文より続く湧水山眠る 友子

背伸びせず素の我となる柚湯かな 友子

2点①みちのくの命の種火藪柑子 守

①颱風過ぬますぎの枝素裸 幸

①虫や空気にはかにフォルテシモ 才美

湯タンポを使ひ始めて夢まどか 葉子

十二月こまめに埋むる予定表 秀一

また痩せてボタンつけかへ年暮るる 清子

言葉まで掠ひて行けり寒四郎 才美

詫手紙そこはかと無く温々し 幸

満杯の袋並びぬ落葉搔 友子

寒くても母のぬくもり新毛布 直子

庭の端寒さを知らぬ八ツ手咲く 葉子

つけまつげつけ爪長し冬珊瑚 ヤエ子

潰されて香り広がる柚子湯かな ヤエ子

歳晩の電車赤子の泣きやまず 守

青空を使ひ果たせず年つまる 弘子

1点①誕生の予定日間近クリスマス 友子

①きまぐれな風に落葉のダンス妙 ヤエ子

①曖昧な地図を頼りに餅屋まで 明美

①空つ風樹木巻き込みうなりゆく 真三

光りたる銀杏落葉のあふれをり 真三

先生はなべて年下街師走 弘子

木の葉髪帽子に納め船の客 明美

低気圧日本列島落葉舞ふ 真壽

冬に来し子らの背丈や石露の花 ツル子

捨て猫の鳴いて寝られぬ寒さかな 葉子

夕刻を猫が猫追ひ枇杷の花 清子

海峡の向かうの民へ雪つぶて 明美

みかん狩りよく頑張つた木に感謝 直子

年の瀬の暦の走馬見え隠れ ツル子

数へ日や神々暦持たるるか 秀一

立ち話を楽しむ試歩や冬日和
からからと落葉踏む音はるかなり
心地よし友の届けし柚の風呂
友子
ヤエ子
葉子

※寒雲の激しき動き鷗群る
ヤエ子

強風に足もと廻るレジ袋
真壽

音冴ゆる高架鉄道銀の橋
守

数へ日のボレロの曲の高まりし
ツル子

冬の朝庭一面の落葉かな
直子

寒風にバス待ちわびる長い列
真壽

当てなくばこの指とまれ冬の蝶
守

落葉して小さくなりけり庭の木々
葉子

冬の雲森のはるかなビルの上
真三

世界中イルミネーションクリスマス
直子

着ぶくれし赤提灯の並ぶ路
ツル子

着ぶくれて魔法のじゅうたん欲しき旅
才美

寒晴や余り牛乳飲み干して
秀一

冬晴や色とりどりの蒲団干す
清子

小屏風に始まる婆の小宇宙
才美

竹藪のこずえに朝陽蒲団干す
真三

花枝名峰富士のくつきりと
清子

枯れ菊焚くてふことの許されず
秀一

ゆず浮かべ心ゆたかにリラックス
真壽

仏壇に千両五本祈るなり
真三

封じ込めの儘ならぬなら落葉焚
幸

山茶花の散華やからつぽ乳母車
才美

晴れ渡る大根畑の猫車
幸

年の暮電飾脇の松狭き
ツル子

声まろき臨月のひと柚子湯かな
守

短日や剣の稽古足早に
直子

小鳥呼ぶ声やさしかり春を待つ
清子

寒風にいつものバスを待ちあぐね
真壽

(不在投句 古野明美、原田清子)

「事務局よりお知らせ」

「一月の定例会」

- ・日時 一月二十六日(日) 午後一時三十分
 - ・会場 旭区民文化センター・サンハート
- (二月の句会は休みです)